

Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.111

試 行 錯 誤



家計の足しに働く子どもたち(タイの農村で)

特集 農民会議「農業と環境」

農民会議「農業と環境」を振り返って	3
農民会議・フィールドマップ	6
連帯して取り戻そう森林を	8
フィールド・トリップ 私たちの農業は生態系を破壊しない	10
元気をもらった会議・参加者の声	13
JVCがめざす豊かなタイの森	19
写真で見る環境プロジェクト	22
タイの森はなぜ消えていったのか	24

トンディーさんの複合農業	12	通訳として大活躍してくれた	17
会議が終わって	18	ソンボットさんに聞く	

森は誰が守り、誰が破壊するのか

世界銀行のI氏、林野庁長官のO氏、JICA参与のK氏などが異口同音に言う。熱帯林伐採の80％は薪炭材、20％のみが用材として使われる。うち、現地消費が5分の4、輸出用にまわされるのは従って伐採の4％。世界の熱帯材のうち、日本の輸入は4分の1だから、日本の責任は熱帯材伐採の1％であると。

FAOの統計の数字を読むと、この数字が出てくる。しかし、ちょっと待ってよ。FAOの数字は、ガス・電気を使っていない人口を単純計算し、どこかの国の誰かが一度に拾ってくる薪を日割りして、人口を掛けているだけなのだ。それ以外にどうやって数字を出せよう。そして、用材にするためには、直径50センチから3メートルもある、樹齢数十年から数百年という、いわば森林の中核である木々を伐採するのに比べて、熱帯林の地域で薪炭材にするのは、間伐材、枝、倒れた木などがおもで、むしろ伐採が他の木の成長を促進する場合もある。同列に論じるのには、どうみても無理があるのは歴然としている。

薪炭材の収集が環境破壊につながってくるのは、自家用ではなく、大都市の周辺の商業的なものと、難民キャンプ、強制居住地など、人為的に人が一カ所に集められた地域の周辺だ。「そこに住む人たちが破壊の元凶」と乱暴にくくらないでほしい。

タンザニアのO氏がタンザニアには植林の伝統がないと言う。そこで住民に環境保護の教育をし、植林の技術を教えてあげているのだと。これだけ聞くと、無知な住民が環境を破壊しているのを想像してしまう。ちょっと待ってよ。タンザニアはアフリカにあっては緑が豊かな国のひとつ、今まで数千年も森林を保護しながら生きてきたのではないか。

質問してみると、実は最近になって伐採会社が入り、ムフーフーという木を中心に切りまくって、そこら中がひどいことになってきたのだという。日本からタンザニアに植林に行くという話をよく聞くので、なぜ比較的緑の多いタンザニアにと思っていたら、なんとムフーフーはよい床材として日本が輸入しているらしい。だったら学生などを使って観光に毛がはえたようなツアーで植林したりしないでよ。大量伐採の習慣がないところに植林の習慣などないのはあたりまえで、住民が無知でもなんでもなかったのだ。

今でも、経済を優先させつつ、技術とマネジメントで地球規模の環境破壊を解決できるとのたまう専門家と称する人たちが多い。彼らは持続的な森林経営を住民に教えずにはと言う。森林の専門家ならもっと現実を見てほしい。誰が守り誰が壊してきたのか。

アマゾンのインディオ、ワッバリア氏が言っていた。「森林を守ってきたのは我々だ」と。同じくアマゾンのバイアカン氏が言っていた。「森林は我々のすべてだ」と。サラワクのブナン人、ニャゴン氏が言っていた。「森林を伐採されるのは家に火をつけられるようなものだ」と。

今回の農民会議「農業と環境」でも、自然から学んだ重みのある言葉が多く聞けた。書物や言葉でしか学んでこなかった日本人の私には、教えられることばかりだった。(み)

農民会議「農業と環境」を振り返って

岩崎駿介

●都市の落とし子

われわれは、無意識のうちにあまりにも地球を追いつめてしまった。この東洋の端に位置する日本に住みながら、われわれが日常手にする「食べもの」、「使うもの」、「捨てるもの」のすべてが、目には見えにくい複雑な流通経路をたどって海外からやってくるため、われわれの生活の影響力、その余波が地球の隅々にまで至って、こんなにまで地球を傷めているとは、私とてもつい最近まで知らなかった。

エチオピアの奥地で飴がとろけるように崩れゆく大地を眺め、タイの田舎ではげゆく山々を訪ね歩き、さらにマレーシア・サラワクで切られゆく大木を目にすると、われわれの贅沢^{ぜいたく}がまぎれもなく、地球と第三世界の人を追いつめていることを知るのである。

われわれが住んでいる都市とは、決して形あるものをいうのではなく、「人」と「もの」と「情報」が行き交う一種の線状のシステムをいうのであり、このシステムがその食いつ持とシステム自体を動かすための資源や動力を求めて、際限なく第三世界の奥に至り、そこで生活する人々を巻き込みながら地球環境を破壊して、さらに増殖を続けていく。

都市は、今から5000年前に「ウルの遺跡」で有名なメソポタミアに、初めて現れたという。都市は大きな伽藍のようなもので、一度その伽藍に魅せられると、昔法隆寺の伽藍に驚き、その畏から逃れることが出来なかった農民のように、現代においてもその怠惰で浪費的な魅力は、人の一生を十分に飲み込んでしまう。

日本においても、都市とそのシステムは長い歴史をもっている。1720年の徳川・享保の時代から、日本の人口は低迷し、3000万人を決して越えることがなかった。しかし、都市システムの拡充、すなわち日本の近代化によって海外諸国との「もの」のやりとりが生ずると、人口は急激に増大して、明治以降の120年間で4倍の1億2000万人にも増えたのである。この期間に増えた人口は、目に見えないかたち

で都市システムに乗り、海外からの資源、あるいは海外の環境に依存して生きてきたのである。いってみれば、われわれは生まれながらにして都市の落とし子だったのである。

●都市と農村にこそ北と南の対立がある

このように、自分が生きることと地球環境との関係、あるいは第三世界の人々との関係を知った上で、私たちに何ができるだろうか。

NGOの活動は、決して現代システムの補完的機能をにうものではない。なぜなら、現代のシステムの過程で発生してくる難民、飢餓、スラム、水の欠乏、環境破壊などの問題は、たまたま一部の人が出会う不幸であるから、これを救済すればよいというものではなく、現代システムと深く結び付いて発生するものだと、それこそJVCの10年の活動を通して実感したのである。

したがって、これらの不幸をなくすには、このシステムを改善することによってはじめて、少しでも改善することができるのである。これらの不幸は、たまたま発生する付属物ではなく、システムの構造と深く結び付いているのだ。

それでは、その構造の急所はどこにあるのだろうか。急所を押さえてこそ、その対策は効を奏する。

その急所は、第三世界の農村と地球環境問題にあるのである。北の富める「国」と南の貧しい「国」との対立という図式でとらえるのではなく、都市と農村の対立としてとらえるべきなのである。かつて、エチオピアのマーシャ村で働いていた伊藤幸子さんが言っていたように、北と南の真の「境」は、開発途上国の都市と農民の間にある。この図式において、途上国の都市は当然北側にある。

タイ・バンコク、あるいはこのたび新しくJVCがはじめたベトナム・ホーチミン市におけるスラム改善プロジェクトのように、都市におけるプロジェクトも、人が生きる上での問題解決と環境改善を住民自身が自主的に行うという意味で、十分に構造を変

革するに足る重みをもっているし、また人類がすでに都市に寄りかかって生きている以上、避けて通ることができないプロジェクトであろう。

しかし、問題は都市を改善し農村から都市への人々の流れの加速を早めても、地球環境問題の解決には結びついていかないのである。真の解決には、地球とともに生きる、地球の奥の奥、すなわち第三世界の農村に接近せねばならない。

●農民会議の意味

今年、1991年5月、タイ・チャイヤブーン県を皮切りに、タイ国内各地の持続的農業の現状を巡回しながら、タイ、ラオス、カンボジア、そしてマレーシアからの農民の参加によって行われた国際会議は、二つの意味をもっていた。

一つは森林伐採、またはキャッサバやトウモロコシの植え付け、あるいはユーカリ植林などによって起っている土壤乾燥や土壤流失の環境破壊が、東南アジアでどのように広がっているのかを調べること。とりわけ、タイの森林枯渇が隣国ラオスやカンボジアにどのような影響を与え、各国の環境問題は相互にどのような関連性をもっているのかを、明らかにすることである。

もう一つは、この現象に各国の農民がどのように対応し、どのような戦略を立てようとしているのかを知り、農民自身がその経験を交流して、より強くなることである。換金作物という、まさに都市の側のわれわれの欲求が、環境にどのような影響を与えているのかを知り、その変革の試みとしての農民交流を企画したのである。

東南アジアの国々は、19世紀から西欧列強の造船のための木材の伐採やモノ・カルチャーとしての換金作物栽培などによって、土地利用に大きな影響を受けてきたが、戦後45年を経た今日、ようやく自国の環境の絶対的行き詰まりを自覚するようになった。北の人々は、過重な欲求を第三世界の人々に投げつけ、第三世界の人々はその過重な負担を自国の環境に投げつけることによって、その苦しみを逃れてきたのである。人々は生きるについての不都合を、先進国の都市から途上国都市へ、そして途上国都市か

ら途上国の農村へ、そして途上国農村からさらに奥なる奥にある、かけがえのない地球環境へと投げつけてきたのである。

したがって、農村における地味が失われ、農民は都会に流れ出るか、さもなくば農村にとどまって地味を傷めない農業の道を模索するか、の絶体絶命的な選択を迫られているのである。

フィリピンにおいても、インドにおいても事情は同じであり、ここに来てようやく地味を回復しつつ生きる方法、すなわち持続的農業の手法が農民自身の手によって開発されようとしているのである。

●持続的農業

持続的農業とは、大別すると三つの手法がある。その一は、平地において溜池を掘り、稲作を中心とする複合経営農業（Integrated Farming）と呼ばれるもの、その二は山地、傾斜地において、窒素固定に役立てるなどの生態的循環に着目して、マメ科などの早生樹を植えて、土止めをしてから果実樹などの樹間に畑作をする森林農業、そしてその三は、四国に在住する福岡正信氏の思想を出発とする不耕起農法である。この不耕起農法とは、「ものごとは、すべてあるがままにせよ」、つまり「あるところの富は、他のところに移してはならない」という思想のもとで、「耕す」のでなく植物の持つ対立形質の特性を生かしながらの混合栽培をいう。実際、熱帯地方の地味のうすい地域にあっては、伝統的に不耕起であることによって、永く地味を保つことができる。

東南アジアの諸地域で起こりつつある持続的農業とは、基本的にこの三つの手法をそれぞれの土地条件に合わせて使い分け、土地からの収奪性を排除して、生活の永続性を確保しようとする運動である。間違っているのは困るが、この農法は先進国による技術開発の結果でもなければ、技術移転でもない。第三世界の農民が苦しい条件の中で自ら生み出した方法である。フィリピンでも、インドでも生み出され、それが相互に交流をしながら、地球環境とともに生きる農民を励ましている。

さらに重要なことは、この農法は単なる技術ではなく、土地に生きる農民の組織、哲学、伝統と密接

チャイヤプーン

5月2日

よく晴れ渡った会議日和、セメント不足で工事が中断していたJVCの植林農業センターが、直前の突貫工事でやっと間に合い、近くの中学校から机と椅子を借りてきて置いたら、りっぱな会議場となった。

JVCタイ代表ボンピモンの開会あいさつに続いて、岩崎駿介の基調報告。スライドを使うときはブラインドを下ろすので少々暑い。

プロジェクト担当者コメンが、チャイヤプーンの森林がはげ山になった背景などを話し、やはり担当者のカセムサンおよび活動地の農民ウィチットが活動を報告。午後はJVCの活動地を視察。換金作物栽培による一面のはげ山のなか、ワンヤイ村の複合経営農業、ヒンダート村の森林農業を訪問。

5月3日

環境を回復する試みをしているNGO、環境破壊を食い止めようとしているNGO、農民の試みを広く紹介したり、農民のために新聞を発行しているNGOなど、タイのNGOによる報告が続いた。夜はスライドによる報告会を行った。



昼食会のあとくつろぐ参加者（タラート村）

コンケン

5月4日

午前中にチャイヤプーンからコンケンへ移動。ずっと乾燥した景色が続く。

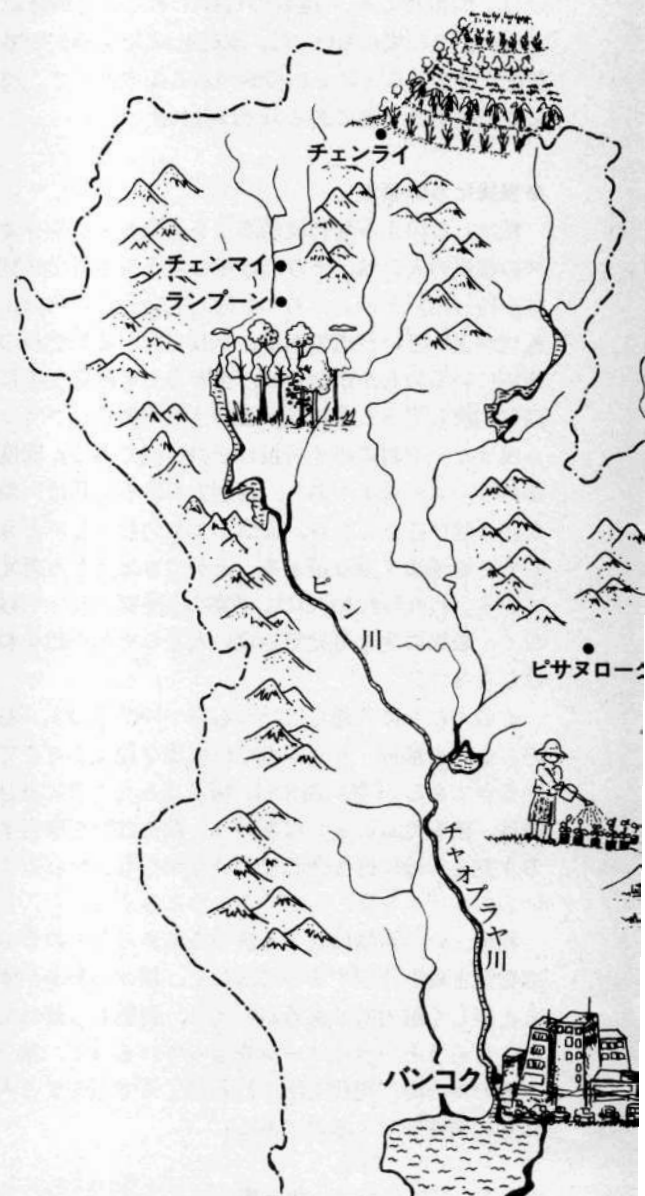
午後にはパイ村長など、おもに東北部の水田地帯で活動している人、NGOなどの報告。そして討論。

5月5日

3つのグループに分かれ、コンケン市内から車で1時間ほどの距離にあるボンサワン村、ドンバン村、

農民会議 フィールドマップ

1991.5.2～5.10





タラート村に複合経営農業を視察に行く。それぞれ、農民たちとともに昼食をとり、懇談をする。

コンケン在住のNGOによる地域的特性を踏まえた報告、複合経営農業について討議。

5月6日

カンボジア農業省の役人たち、来られなかった農民に代わってJVCの本橋、避難民キャンプの農民たちがカンボジアの森林伐採、森林経営の現状や農業について報告。

ラオスの農民たちがそれぞれの農業を報告。JVCのタノンシーが森林伐採などについて報告。

マレーシア、サラワクの農民たちが彼らの伝統的な農業や彼らの生活を根底から崩している森林伐採、それに反対して道路封鎖をしている様子などをスライドを使って報告。

チェンライ

5月7日

コンケンからチェンライへ移動。朝早くから夕方まで、ずっと車に揺られどおし。

5月8日

チェンライの街から車で1時間半、ラオスとの国境に近いデーナムアン村の森林農業を視察。昼食の後、チェンマイに移動。

チェンマイ

5月9日

2つのグループに分かれ、1グループはパーノート村の森林農業を視察、別のグループはライ病の治療のためにつくられたリハビリテーションセンターで有機農業を視察。リハビリテーションセンターで農業指導をしているのは、在住8年の浅井さん。

ランブーン県のトゥンヤオ村で合流し、共同体が残してきた森林を見て話を聞く。

5月10日

チェンマイのNGOによる北部山岳地帯の環境破壊、および農業の現状の報告。

会議の全過程を通じて中心議題となった森林農業、複合経営農業、リーダーシップなど7つのテーマ別にグループに分かれ、分科会で議論。その結果を全体会に持ち寄り、まとめて閉会した。



連帯して取り戻そう森林を

ウィットーン・P・チャロン

農民会議「農業と環境」にたくさんのタイのNGOが参加してくれました。そのひとつ、「生態系回復計画(Project for Ecological Recovery)」代表のウィットーン氏の提言を以下に紹介します。

政府の政策によって森の破壊者にされる農民

まず、3週間前にカンボジア国境に近い、ブリラム県バカム郡で起こった事件を紹介しましょう。保護地区に指定されている森で、プラチャック師という僧侶が逮捕されました。その前にも、数十名の村人たちが逮捕されていたのです。この事件に対し、農民たちはなぜ村人や僧侶が逮捕されたのかということに疑問を抱きました。彼らの逮捕理由は、保護地区に指定されている森に侵入し、居住しているということです。実際、タイではプラチャック師と同じ状況にいる人々、つまり保護地区に居住している人々は1千万人にのぼります。私はこの地方の歴史を詳しくは知りませんが、おそらくブリラム県に住むほとんどの人々は逮捕の対象になってしまうでしょう。つまり、タイは1千万人の人々が逮捕の対象になる状況にあるのです。

これは重大問題です。しかし、実際にはほんの数人しか逮捕されていません。なぜ、このようなことが起きているのでしょうか？確かに、1千万人もの人々が犯罪を犯して逮捕の対象となっているとすれば、それは大変な社会問題ですが、今回の事件の場合、人々は単に机上の法律と食い違っていただけにすぎません。確かに法律上では、1千万人が保護地区に不法居住している状況にあります。しかし、政府はこの条例を選択的に使っています。ある人物については逮捕し、それ以外の多くの人々に対しては依然として居住を許すという方法です。なぜなら、おとなしく農業をやってくれる農民を住まわせることは必要で、政府の森林政策や農業政策に反対する者は不必要だからです。

ここで、保護地区の指定と森林保護に関する政府の方針について、その背景を紹介しましょう。そうすればこの問題の全景が理解できると思います。

昔から、人々は自由に森に入り利用することができました。約30年前には国土の半分以上が森で覆わ

れていたのです。その頃は誰でも森に自由に入り、開墾して自分の所有地とし、国作りに協力していたのです。現在のような開発や都市化は起こっていませんでした。

ところが、木材が輸出されはじめ、外貨獲得の必需品となると、政府は森林保護と土地に関して強制力を持つ法律を適用するようになりました。その法律とは、国有地をたてに政府が木材伐採や換金作物の栽培を自由にできるよう、保護するためのものなのです。そのため、それまでは自由に森に入ることができた、ずっと以前からそこに住んでいた農民たちが、ある日突然犯罪者になってしまったのです。そして、伐採契約書を持っている人物が突然森にやってきて、森を伐採してしまいました。政府は国土の50%程も国有地や保護地区に指定しました。

ここで問題なのは森林を破壊したのは誰なのかということです。この問いを森林局にぶつけてみても、答えは「貧しく、教養のない農民だ」ということになります。こうした態度が原因となって、3週間前のような、僧侶や村人の逮捕事件が起きているのです。

ダム建設で失われる森

ここまで私は土地利用と森林の問題について話してきましたが、水という別な資源をめぐる問題も問題が起きている。

タイでは昔から小規模の灌漑技術がたいへん発達していました。ところが、産業部門の水に対する要求がどんどん増えていくため、政府はダムの建設に着手していきました。現在は都市、企業、農民ともに水への要求が増えています。けれども水という資源は限られています。問題はダムの建設は誰に利益をもたらすかということです。多目的ダムの水位がだんだん下がって、水を発電に利用するか都市、企業への水供給に利用するか灌漑に利用するか決めなければならないとき、たいていは灌漑があとまわしになります。灌漑目的と名うって、わが国最初の国立公園、カオヤイに計画中のダムでさえ、調査してみると、カオヤイの町、ホテルなどの観光、および企業のためにほとんど利用されるのです。

政府によると、産業拡大のためには電気エネルギー消費で1年につき13%の増加が必要だとされています。そのために国中でダムの建設を奨励しているわけです。ダムを一つ建設するために、いったい何人の農民たちが立ち退かされ、どれほどの豊かな耕地や森が永遠に沈むことでしょうか。そしてそのためにどれほどの面積の森林を伐採しなければならないでしょう。これらの問題から、大規模ダム建設反対運動が起こるようになりました。

例として、ビルマ国境付近に建設を予定していた大規模ダムのナムトゥンダムがあります。このダムが建設されると、広大な土地と森林が水に沈むので、住民の反対運動が起きました。タイ社会はそのようなダムをもう望んでいません。

国内にダムを建設するのが難しくなると、政府は国内でなく近隣の国にダム建設をもくろむようになりました。現在メコン川の上流、ラオス国内にたくさんのダム建設が予定されており、さらにビルマのサルウィン川のタイ国境付近、そして将来はカンボジアやベトナムにもダムを建設しようとしています。しかも、これらのダムは建設される国が利用するのではなく、タイに電力を供給するためのものなのです。

しかし、タイの人々はこのことにはひどく無関心なのです。タイは今まで述べてきたように、様々な問題を経験し、学んだはずなのにです。私は近隣の国々、中国、ベトナム、ラオス、カンボジアが開発に乗り出す前に、これらの国の人たちに、タイの経験を知り、学んで欲しいと思っています。

環境の回復とネットワーク作り

今、タイでは土地、森、水の問題について、政府、NGOなどが問題を解決しようと試みています。遅すぎなければいいのですが。もしタイでは遅すぎるとしても、近隣諸国ならまだ間に合うはずです。タイはとても厳しい経験をしました。その原因は、村人たちを森から切り離し、地域社会から切り離し、資源を人々の生活のためではなく、市場経済に利用したことにあるのです。

これまで地域社会と森との本当の関係は理解されてきませんでした。それは、単に生活材としての木材を利用するというのではなく、もっともっと深いものなのです。こういった厳しく長い歴史にもかかわらず、村によっては小さな範囲の森を、それはコミュニティフォレストとも言われているのですが、



ずっと守り続けてきた人々もいるのです。私はこの方法が、資源闘争への一つの解決法だと感じています。なぜなら、コミュニティフォレストは人々が森から切り離されたことへの挑戦、また森が木材以上の存在であることを示す方法だと思うのです。

森林破壊を食い止め緑を回復する方法と称して、大企業が来て土地を買い占め、人々を追い出し、ユーカリを植林していますが、このやり方では長期的な問題解決にはならないと思っています。これに対する代案と私が信じているのは、その地域に住む人々が結集して力を合わせることです。

一方で、国有地に住んでいる1千万人の人々も、森の木を切り、市場要求に応えるために換金作物を栽培し、農薬を多量に使って土壌を疲弊させています。こうした国有地に住む人々が優先的にとるべき別な方法は、農薬に依存した農業ではなくて、長期的にみればずっと継続（維持）可能である「自然農法」です。

それでは、どんな地域にはどんな技術が適しているのでしょうか？ 既に私たちは、外国から輸入されたものではない、地域の知恵（local wisdom）に基づいた技術や、知識を持っているはずで、土地問題の解決、農薬依存の農業からの脱却などを目指して、田舎に息づく知恵を大切に、近隣諸国の人々と協力していきたいと思っています。土地、森、水などの地域の資源は、そこに住む人たちがその管理をし、地域の知恵に基づいて利用することが大切です。

もう一つ重要なのは、ダムの建設や森林伐採を目的にやって来る外部勢力に対して、村人たちが交渉力をつけることです。

NGO、各地域の村人たち、学識者など、国境を越えてさまざまな分野の人々や組織がネットワークを作り、ロビー活動などを通じて、政府の方針や開発の方向を変えていくためにも、力を合わせていきましょう。

私たちの農業は生態系を破壊しない

東村康文

今回の農民会議「農業と環境」では、話し合いだけではなく、チャイヤブーン、コンケン、チェンライ、チェンマイのそれぞれの地域で農業の実践地を訪問した。複合経営農業(Integrated Farming)、森林農業(Agro-forestry)、共同体林(Community Forest)を行っている現場のうち、複合経営農業と森林農業の実践地をそれぞれ一カ所ずつ選び、訪問地の様子を伝えたい。

複合経営農業 (5月5日訪問)

コンケンとはタイの東北地方(イサーン)の最も大きな都市の一つである。米やキャッサバの集荷地として知られている。一帯には森林はほとんどなく、耕作前の乾燥した畑や田んぼが広がっている。市街から約1時間車を走らせて、ポンサワン村を訪問した。

まず、この村で活動しているNGO「東北タイ民衆組織」(People's Organization Northeast Thailand)の代表のチャリン氏から活動の説明があり、次に農民リーダーであり、複合経営農業(Integrated Farming)を推進しているトゥイ氏を交えて、質問の時間が設けられた。この村では、複合経営農業とともに米銀行、村基金、機織りなどの活動が行われている。

《チャリン氏による説明》

「私の所属するNGOの活動は、コンケンで1981年から始まった。現在9つの村で活動をしている。村単位に人々を組織して、複合経営農業、米銀行、牛銀行などを広げ、強化すると同時に、他の村へ農民を見学、トレーニングに連れて行くことなどを行っている。どんな活動を選択するかについては、各村の興味と必要性に応じて助言する。

開始するには資金が必要な活動もあり、そのために村人が自身で運営する基金を作っている。基金の中から必要な人に補助金を交付したり、貸し付けを行ったりする。

ひとつの村から3～4人の代表を選び、代表(現在は27人)会議を構成している。代表会議の中に

は部会を作っており、それぞれの部会ごとに役割を分担して、組織全体の運営にあたっている。

《質疑応答》

松井(ジャーナリスト): 27人の代表の中に女性は入っているのか。

トゥイ(村のリーダー): 入っていない。しかし、女性の役割は非常に大きく、村の中では活躍している。特に家庭内、村内については女性は重要。男性は、村と村との対外交渉的なことを行っている。

ジョク・ワン(マレーシア): 今抱えている問題点は何か?

トゥイ: 水不足と、土地なし農民の問題だ。雨が減り、川も干上がるので、池を掘って使っている。

松井: 何%が複合経営農業を行っているのか。

チャリン: 全体の約20%にあたる115世帯。以前、この村ではサトウキビ畑が多く、米はほとんど作っていなかったため、米は市場で買わなくてはならなかった。今、複合経営農業で栽培したものは、自家消費用にあてており、農薬や化学肥料は全く使っていない。

最後にチャリン氏が次のようにまとめた。

活動の中で常に意識していることは、(1)米の自給。(2)村の基金としてみんなで積み立て、必要時に貸し出す。(3)農民に必要な情報を集めて伝え、トレーニングにも力を入れる。(4)誰にでも複合経営農業が始められるという自信を持ってもらう、などの点だ。また、村の10%の人が土地なし農民なので、その問題もなんとか解決していかなければならない。

森林農業 (5月7日訪問)

チェンライは、タイの最北端に位置している。盆地にある市街から1時間以上車を飛ばし、ラオス国境に近い山岳地帯に、デーナムアン村を訪問した。まず、教会の集会場(この村では80%がキリスト教徒、20%が仏教徒)において、森林農業(Agro-

forestry)の説明を受けた。説明をしたインカム氏は、1982年から森林農業を推進している。

「このあたりの人々は以前は水田しか作っていなかった。しかし、大洪水があって一面水びたしとなり、米のとれない年があってから山を切り開いた。焼いた斜面に陸稲を植え続けたところ土壌が劣化し、雨が表土を洗い流してしまった。そこで試行錯誤しながら森林農業を始めた。後にNGO(マッケーン医療センター)の協力でフィリピンのNGOを訪問し、等高線農業の技術も習った」

農家1戸1戸が深い緑に囲まれて、豊かな印象を受けるデーナムアン村も、ひとたび山に目を移すと、どこまでもはげ山。そのなかにぽつぽつと森林農業をやっている畑が見える。長年インカム氏が森林農業を推進してきたにもかかわらず、あとに続いたのは10戸ほどだ。

まず、始めてから数年の人の畑を訪問、それからインカム氏の畑を見た。同じ森林農業といっても、樹木を中心に植えている畑と、穀物やタバコを中心に植える畑ではずいぶん印象は違って見えた。

ここでは、等高線に沿って土止め用の木を6~10m間隔で列状に植える方法で、斜面での土壌流出を防いでいる。列状に植えた木は、1mほどの高さに伸びたら、50cmほど残して刈り取り、刈り取っ

た葉や枝はそのまま緑肥として使う。そのため、樹種としては、早く成長し、肥料にする葉の分量ができるだけ多く、しかも土中では窒素を固定できる豆科の植物であることが望ましく、ジャイアント・イビルイビルやその他のアカシア類が使われている。

列の間には、ライチー、マンゴー、竜眼、パイナップル、ジャックフルーツ、レモンなどの果物、レモングラスなどの香辛料、コーヒー、ステビア(甘味料)などが植えてあり、季節によっては穀物や野菜も植える。

インカム氏は匂いがきつい、ありふれた雑草を緑肥として使っている。ベトナムへ行ったことのあるタイ人と、カンボジアに行ったことのある日本人から、両国でも肥料として使っているとの報告があり、国際会議ならではの発見で、なかなかおもしろかった。

ここでも生産物は家族自給が優先されている。しかし、コーヒー、ステビアなどのように換金を目的とした作物も栽培されていた。畑の一部ではちょうどたわわに実ったライチーが食べごろで、40人もの見学者はハイエナのようにライチーに襲いかかり、乾いたのを潤してしまった。

農業、化学肥料は使っていない。インカム氏は、「もし虫が葉を食べば、まず雨が降って虫が逃げて行くのを待つ。それでもだめなようなら、虫が食わないような植物を植える」と言っていた。



(左上) ポンサワン村での説明会(正面右がチャリン氏)

(左下) 複合経営農業(ポンサワン村)



(右上) 中央がインカム氏

(右下) インカム氏の農地を訪れた会議の参加者

タイ・タラート村 トンディーさんの複合農業

タラート村は80家族が住む中規模の村で、75年前に4家族が移り住んできて、森を開墾し、田んぼにしたときから村の歴史が始まった。

人々は稲を栽培し、まわりの森から野草や野生動物などの食糧を探し、絹や綿を作り、牛、水牛、あひる、鶏などの家畜を飼った。

1957年、ジュートが初の換金作物として導入され、1971年にはキャッサバが登場した。しかし、タラート村では耕地のほとんどが水田で、少しだけある畑はとうがらし、桑、綿の栽培にすでに利用されていたため、ジュートやキャッサバ栽培に転向する人は少なかった。

村が変化した大きな原因は、米を商人に売りはじめたことだ。かつて、米は自家用に、あるいは他の物と交換するために取っておいた。商人が米を買いに村へ来て以来、村人たちはより多くの米を作りたいと思うようになり、水を得るために川を堰止めた。一年中水が流れ、深かった川は浅くなった。以前より米の生産量はあがったのに、家族が食べるための米は減ってしまった。まわりの村でジュートやキャッサバを大量に生産するために森を開墾したことも、生活に影響した。

自然の食物の源が破壊され、この地域の環境は変化した。干ばつは以前より頻繁に起こるようになった。干ばつの年には、米がほとんどとれない。人々ははじめて飢えを経験した。

そんな中で、トンディーさんは考えていく。

前に進もうとしたら、後ろを見なくてはならない

「我々は先人の教えを常に無視してきた。自分たちのやったことが進歩的だと思っていたが、実は後戻りだった。先人は十分な食べ物を得るために働くように教えたが、我々はそれを無視した。先人は、もし米を売りたいと思うなら次の収穫があるまで待つように教えたが、我々は借金を返したり、物を買うためのお金が欲しいから急いで米を売った。だから次の年が干ばつだと、納屋に米がなくて飢えることになる。

今では売るためではなく、食べるための農業に変えた。自分で作れるものは買わずに作る。食べ

るものが十分あると、不思議なことにお金が増えてきた」

みんなが池を掘れば川となり、みんなが木を植えれば森となる

「かつては自然の川と森があり、食べ物豊富にとれた。雨期には、舟がないと渡れないほど大きな川で村人たちは魚を捕った。田んぼが増え、田に水がいくよう堰を作ってから、川は浅くなりはじめた。森を切ったため土が流れ込み、川はますます浅くなり、ここ数年はまったく干上がってしまった。

水源もなくなり、魚もとれなくなったので、田んぼに池を掘ることにした。みんながたくさん池を掘れば川になるだろうか。

森を開墾したため、野生の食糧がなくなってしまい、魚の池のそばに野菜を植え、果樹や家を作るための木を育てなくてはならなくなった。みんながたくさん木を植えれば森ができるだろうか」

たくさん育て過ぎるとほとんど得ることができない。しかし少し育てるとたくさん得ることができる

「私が果樹を五本植えたのを見て、ある人が一度に五十本の木を植えた。だんだん水やりがたいへんになってとうとう投げ出したため、苗は全部枯れてしまった。毎年五本ずつ植えた私は、いま、たくさんの果物を収穫している」

急いで結果を得ようとしてはよい結果が得られない。決めたことは必ずやるとよい結果が得られる

「ある人が池を見てこれはいいと思い、一日で掘りあげてしまった。そのために身体をこわし、以後は興味を失ってしまった。ある人は池を一日に一立方メートルだけ掘ることに決めた。一立方メートル掘っても体力の余っているときもあったけれど、そこでやめておいた。数カ月ののち池は立派に完成し、魚を飼い、水源として役だっている」

元気をもらった会議 参加者の声

タイ

農民会議のよかった点

農業に関する情報が得られ、とても有意義だった。土壌や森林保全の話聞くだけでなく、実施の現場を見ることによって、問題とそれへの取り組みがわかりやすかった。外国の人たちとの意見交換ができ、お互いの向上に役だった。

残念だった点

通訳で時間が切られ、理解しにくかったし、時間がかかった。テーマが多岐にわたりすぎ、レベルも分野も背景も違うので、無駄があった。専門家は自分のことを話すだけで、十分討議する時間がなかった。現場訪問は、始めたばかりの場所は省き、すでに成功している所だけの方がいい。

*カンパナートさんはJVCの農民の若手ホープだ。農業のこと、植物のことなんでもよく知っており、意欲的だ。しかし、カンパナートさん、国際会議に通訳はつきものだよ。タイ語だけでやれるわけじゃないか。

カンパナートさん(24歳) ピサヌローク県

いろんな国の人たちが経験や知識を待ち寄って、スライドなどにして見せてくれ、おもしろかった。外国から来た人たちも、国際会議で得たものを彼らの国に持ち帰り、広めることができるだろう。

私も農業の開発に前よりも関心を持った。ずっとノートをとったので、村のみんなに伝えたい。そして、JVCの活動の一環として、村に複合経営農業を広めていきたい。

スニット村長(54歳) ピサヌローク県



ウィチットさん

タイ農民と各国の人たちとの出会いがあった。問題とその解決法を見つけようと、いろいろな分野の人たちが集まってくれた。よその国の人たちもそれぞれ問題を抱えていることがわかった。誰もがいま、環境に優しい生き方を失ってしまっている。

いろいろなところを訪ねることができた。自分なりの生き方を見だし、それを共同体の活動にまで広げようとしている人たちに会えてよかった。

ぜひ毎年農民会議を開いて欲しい。次回から、政府の役人も巻き込んだ方が会議をスムーズに開けるのではないか。

ありがとう。すべてが役にたった。

私はよりいっそう力を入れ、植林のための苗作りをし、畜産にも励みたい。農民会議に参加したことによって、自分のためにだけ複合経営農業を進めるのではなく、村全体に活動を広げなければならないことを実感し、実施のヒントを得ることもできた。

ウィチットさん(36歳) チャイヤブーン県

世界中で、生活のため、生きるために、人々がどんなに環境を破壊しているのかよくわかった。人にはよいものを求める心がある。だから、このような破壊の悪影響を見たら、よくしたいと思うと信じたい。世界中に森林を蘇らせ、天候を正常に戻し、幸せになるために、この農民会議は第一ステップとなるだろう。

ダムロンくん(19歳) JVCクロントイ図書館



ダムロンくん

ラオス



スッチャイさん



ダルニーさん

丘陵地農業を営むスピン小父さんは、タイに行ったことによって、自分のやってきた農業に自信を持って帰ってきた。さらに改良するアイデアも得てきたようだ。今は、自分の畑の斜面の裾の平らな場所に魚の養殖用の池を掘っている。

「人々を巻き込むことと、村の活動として取り組むことの大切さを学んだ。村の人々がやる気になることが一番の原動力だ。もちろん、個々の農業技術も参考になったけど、自分がすでにやっていることも多かった。こんなにひどい状況を作ってしまった原因である換金作物中心の農業や、大型トラクターを使用する農業の恐ろしさを思い知った」と、スッチャイ小父さん。

彼自身、農薬被害で何度も入院したあと、一大決心してすっかり自然農業に切り替えた経験がある。今は水田で魚を飼い、果樹も植える複合経営農業に取り組んでいる。これまで自分のやっている農業に関しては、JVCから頼まれたとき、農村生活改善の女性普及員とともに村を訪問して経験を話すくらいだった。しかし、今回タイに行き、これからはもっと積極的に自分の村の人たちに複合経営農業を広めようと決意している。

「タイで見たことを自分の村の人たちにぜひ伝えたい」と、ダルニーさん。彼女は村の婦人同盟の役員をしている。彼女が住むのはビエンチャン近郊農村、地の利をいかして花の栽培が盛んな地域である。彼女は、すでに広めつつある自然農業に加えて、タイで見た手軽な堆肥作りを普及したいと意欲的だ。

トゥンヤオ村の森には、みんな感心している。政府の役人が森の中に建物を建設したいと言ってきたときもはね返し、政府の許可を持った伐採企業が来たときもはね返して森を守ってきたのはすごいことだ。かつて住んでいた村で、森を伐採したために干ばつにあった苦い経験が、彼らの森を守る力になっている。なにかをしようとするれば、人々の経験や歴史を生かすことが大事だ。

トゥンヤオ村では誰も山を焼いたりしなかった。村人たちがよく木を切らないという約束が守れたという話になり、一人が「罰金を科したことがよかったのでは」と言った。すると、JVCラオスのスタッフのタノンシーさんは、「いや、罰金を決めた人々の決意がよかったんだよ」と言った。

参加したラオス人たちは、それぞれが一人で孤独にやっているのではなく、ラオスにもタイにも仲間がいると実感することができた。自分がこれと思ってやってきた農業を、自信をもって続けていいんだと改めて認識でき、みんな前以上に元気になった。

カンボジア



カンボジアから3人の農民を招待した。途中で、農民だけでは許可が出ないということで、政府の役人3人も招待することになった。

カンボジアとタイに国交がないこと、農民の出国は前例がないことなどから、手続きは手間取り続け、とうとう到着予定日になっても農民には出国許可がおりず、3人の役人だけの参加となった。

参加した役人は農業省農業局のチャン・トン・イヴさん(46歳)、計画局のシン・ヴァさん(46歳)、森林局のチム・ソーミエンさん(42歳)。最初のうち緊張していたのか打ち解けず、とても堅い感じだった。しかし、国境から参加した2人のカンボジア人との出会いも影響したのか、終わる頃にはすっかり打ち解け、別人のようであった。

彼らは政府の役人であるため、立場上どうしても農民を「コントロール」したり「マネジメント」したりしようとする。そのことについては会議中、何度か論争にもなった。しかし、議論と実際に見ることによって、彼らも少しずつ農民の立場から考えることが理解できるようになったようだった。



森を守ったトゥンヤオ村

「タイ農村はある程度開発が進んでいるように見える。にもかかわらず、実は農民たちは多額の負債を抱えていることが印象に残った。会議の中で、環境保護と、企業活動の関係についても、もっと話し合いたかった」とチャンさん。とても有益な経験だったけれど、スケジュールはちょっときつかったとつけ加えた。



カンボジアからの参加者

「コンケン村が一番印象に残った。複合経営農業とともに、米銀行、伝統医療、村基金、補助給食などさまざまな活動が村人の手で行われており、よく組織化されている」と述べていたのはシンさん。

シンさんは、カンボジアで複合経営農業をはじめると、とくに森林破壊の著しいモンドルギリ県、ラッタナギリ県など東北部が適地であろうと言っている。

今後、カンボジア政府は、当然経済開発をめざす方向に進むであろう。そんなとき、複合経営農業を推進する草の根の人たちがいること、その方法だけが環境を保全する方法ではないかということを知った、シンさんたちのような役人がいることに大きな意味がある。たとえ、国策として大規模農業や商品作物栽培の導入を捨てることができないとしても。

シンさんは、タイで、都市の圧力が農村の環境を破壊し、農村の環境破壊がそこに住む人々を都市へと追い立てるという現実を見た。環境を破壊しないで経済開発はありえるかどうか、この問題について、会議期間中もっと議論すればよかったと、心残りに思っている。

国境避難民キャンプ からの参加

チャ・チョック小父さん(63歳)とケ・ネーム小父さん(57歳)はタイ・カンボジア国境のカンボジア避難民キャンプ、サイト2から参加した。彼らは根っからの農民で、いつか祖国で農業をすることを夢見ながら、キャンプの中の小さな土地を耕している。出口の見つけにくかった避難民の身の振り方も、本国帰還という一番自然な解決に向けて、少しずつ努力が続けられるいま、彼らにもタイの環境破壊の現状と、破壊せず自立する農業の試みを知ってもらおうと会議に招待した。

ケ・ネーム小父さんはきつい長旅の道中、車の中では一睡もしなかった。

「どこまでも広がるはげ山の様子、農家の庭先、働く農民たち、通り過ぎる町のにぎわい、植生など、ひとつ残らず見たいから眠る暇はなかった」

伝統医療師のチャ・チョック小父さんは薬草に詳しく、どこに行っても、薬草になる草や木を探しだしてきて、同胞や他の人たちに製法と効用を伝授していた。役人のチムさんは、おじいさんからは学ぶことが多いと感心することしきりだった。

チムさんの印象に残っているのは複合経営農業を推進するコンケン・ポンサワン村と、村人が自分たちの森を守り抜いてきたトゥンヤオ村の2カ所。チムさんもまた、複合経営農業・有機農業はカンボジアにとっても非常に重要であることを感じた。

植物性農業に関して、チムさんはカンボジアでも農業普及員を通じて農民に紹介していったらいいと考えている。

「植物性農業の配合などは、カンボジアでは知られていなかった。今回の会議で、技術的なことを勉強させてもらったと同時に、タイ、ラオスなどの農民たちと直接接することができ、彼らの声が聞けてよかった」と、チムさんは言っている。



ネームさん(左)とチョックさん(右)

カンボジア国内の人と国境にいる人との距離は遠い。今も続く内戦……同胞でありながら、いわば敵同士の関係にある。しかし我々の心配をよそに、チャイブーンのJVC植林農業センターで会った5人は我れ先にと手を取りあい、出会いを心から喜んだ。そのあとも、話しても話しても話し足りないというふうに、毎日5人で話し続けていた。農民、役人と立場の違う人たちが、それぞれの知恵と知識をタイの農業の現実に照らしつつ、学び合える機会をもてたことは、この会議のひとつの大きな成果であった。

カンボジアの農村と避難民キャンプにしか住んだことのない2人にとって、今回の会議で一番めんどかったのは、近代的な施設だったようだ。エレベーターを使うのも初めてなら、3階以上の建物にのぼるのも初めてだった。通訳としてずっと行動をとともにしてくれたソムヨットさんによると、2人はホテルで洋式のトイレの便座に乗って用を足そうとしたら、「毛布がない」と言うのでシーツとシーツでくるんである毛布を見せると、ていねいにシーツを全部剥し、毛布をひっぱり出して掛けたりするだけではなく、知らずに熱いシャワーをもらって火傷しそうになったり、ガラスの扉を通り抜けようとしてガラスにぶつかったり、痛い思いや危険な思いもたくさんしたようだった。

通訳として大活躍してくれた ソンポットさんに聞く

聞き手 加藤真理子

●JVCの農民会議「農業と環境」についての感想を聞かせてください

まず、岩崎さんの講演がよかった。総括的で、大局的なまとめ方で他の会議ではこのようなものはなかった。もうひとつは、各国がそれぞれの国のことや、活動のことを報告し、その報告がひとつのものにまとまったというのが、他の会議と比べて一番目立った部分だった。

●もっと具体的に聞かせてください

第一にインターナショナルなことがよかった。カンボジアの人もタイのことを知ることができ、タイの人も他の国のことを知ることができた。これは、タイのNGOではできないことである。

第二に、時間の配分がよかった。環境問題に関する要素をすべて抽出することができた。これもタイのNGOではできないことである。

第三に運営がよかった。時間が節約でき、短時間でいろんなことができた。何か問題が起こっても、みんなで助け合ってやっていたのがよかった。

第四に日本人の仕事の仕方が観察できて、個人的に非常に興味深かった。タイのNGOの現場で働いている人たちもそうだが、いつも、考えを交換しながら長い時間を話し合いに費やしていた。このことは、チームで仕事をするとき団結を強めるのに大切なことで、非常に印象深かった。

第五に贅沢^{ぜいたく}や無駄なことをしなかったのが印象的だった。例えば、はじめや終わりに無駄な長ったらしいあいさつなどなかった。タイの場合、どうしてもその無駄な部分に時間を多くとられてしまう。これが日本の経済発展を助けたのかもしれない。

●持続的農業についてどう思いますか

我々NGOなどが広報し、トレーニングすることを通じて新しい友だちを増やし、それぞれが自分の地域でやっていることを続ければ、この農法を広げることは可能だ。Integrated FarmingやAgro-forestryなど、人々のためになることは確実に、少しずつやっていく。これは「もうひとつ

の生き方」を選び取るということであるが、我々が少数派であることは間違いないようだ。

私は普及にはそんなに多くを期待していない。「もうひとつの生き方」を普及できても、最高40%だと思う。今回訪ねたインカムさんのところがいい例だ。彼が自分でやり、その成果を見せても他の人たちは同じようにやらない。他の人たちはもっと贅沢^{ぜいたく}を求め、新しい価値観や文化を選ぶ。だから、私はパーセンテージには興味がない。少しずつ増やし努力していくことで満足だ。

●これからのJVCの役割についてアドバイスを

まず、インターナショナルNGOとして、国と国を結ぶ役割がある。そして二つ目には、ローカルNGOとして、ブリラム、チャイヤブーン、バンコクのスラムでの活動をもっと充実させてよき例とする。ローカルNGOとしての活動を充実しないと、もう一つの役割が弱くなる。ローカルNGOとして地元でのネットワーク作りも大切である。

開発の仕事には二つの部分がある。一つはしっかりしたプログラムによって地域に根ざして活動すること、もう一つはキャンペーンなどを行い政治的、社会的運動を育てていくこと。二つとも重要であり、一つだけしていても効果は少ない。同時に二つのことを行っていかなければならない。

JVCはインターナショナルとローカルな部分の両方を持っているのだから、それを最大限に利用すべきである。

印象に残ったことをもう一つあげると、今回は会議で討議するだけではなく、サラワクに人を送るなどその後につなげる行動があった。会議でしゃべるだけでは不十分。行動につなげるのはいいことだ。

最後に、日本是世界の中で経済、政治において影響力のある国である。発展の過程でどんな問題が起こったのか、それをどう乗り越えてきたのかというような経験を、日本を追う国々(タイなど)に伝えることができる。もちろん、伝えたあと、他の国々がどういった発展の道を選ぶかは国によるが。

会議が終わって

谷山博史：農民会議では、チャイヤブーンの植林事業の対外的な紹介があり、これは、JVCのスタッフおよび農民にとって効果があった。彼らの活動は孤独ではなく、成果は広く外でも問われていることを自覚するのに役立った。

タイのNGOとの関係が深まった。今後、共通の問題を見すえ、解決に向けて連絡会議を組織するなど具体的な行動を積み重ねて、次回の農民会議へとつなげたい。JVCタイの方向づけにも役だった。

ラオスの農民にとって、「俺たちもやっている」という自信がつく貴重な経験が得られた。

カンボジアの役人は会議の最初と終わりではずいぶん印象が違い、だんだんよくなった。これまで、カンボジアではJVCは農業省と関係がなかったが、農民会議と一緒にやり、活動を広げやすくなった。

マレーシアの人たちは、森林伐採による生活破壊という緊急な問題を抱えているにもかかわらず、いまひとつ自分のこととして捉えられていなかった。

東村康文：僕自身の準備不足を痛感した。環境破壊の実態を、表、グラフなど視覚的なデータにまとめておき、臨機応変に表示できればよかった。

久保早恵：カンボジアから農業省の人が参加したのはよかった。彼らは見学地だけではなく、タイのはげ山の景色にショックを受けていた。知りがっていったユーカリの知識も得たようだ。

岩崎駿介：今後の課題として、農民会議で得たものをどう伝えていくか。チャイヤブーンの植林・環境回復事業を5年、10年かけてどう具体化するか、マレーシアにパイ村長などを送ることを決めたが、すでに伝統的な価値観の破壊がすさまじいマレーシアに、タイの経験をどういかにせるか、などがある。

国家維持のため、都市は森林など農村の資源を売り、換金作物を売って財源として使ってきたが底をついた。環境を破壊しない農業を推進する人たちは農業人口の2%のみだ。農村での肉体労働より都市で生きる方が簡単だととらえられている。この傾向がもっと広がる可能性があるのかどうか。追いつめられたタイはラオス、ビルマ、カンボジアへと資源の供給地を拡大し、環境破壊を広げる。我々に何ができるのか。

JATAN(熱帯林行動ネットワーク)の黒田くんは一貫してシステムを批判しているが、現代のシステ

ムを解明し、その鍵になるもの、コンピューターシステムでいえばMS-DOSにあたるものを見つける、あるいは作る必要がある。

岩崎美佐子：システムを変えれば社会も変わるというのが黒田さんの方法。構成員である個人が変われば、システムも変わるので底辺から変えようというのがJVCの方法。JVCの場合、プロジェクトの実施・成功があって、はじめて主張が説得性のあるものとなる。

今回痛感したのは、タイ人たちがマレーシアの問題を知らず、自分に引きつけて考えられないこと。タイ・マレーシア間の木材取引の実態など、もっと両国の関係がわかる情報を用意しておけばよかった。久保：先進国は破壊しつくして後悔している。もっとそれを主張してもいいのではないか。

駿介：「システムの中心に近づく」と他を収奪するようになる。それはやめなさい」とは言えない。こうなるとまずいという歴史的教訓より、今彼らが抱えている問題のなかでどうするかをともに考えることが大切だ。

谷山：ラオス、カンボジアは周辺にあるからこそ、問題を解決する方法として複合経営農業などの必然性が高く、これらの国はオールタナティブな可能性があると考えられないか。

駿介：そうは思えない。ラオスもメコン川に橋がかかればすべて崩れるだろう。コンケン、トンディーさんは、村は昔は豊かだったと言っていたけれど、いまでは骨だけだ。完全に破壊されたところで、自分はいったい何なのか考えたのではないか。生きることの捉え方を変えることからではなくては変わらない。徹底的に破壊されていないラオスにこれを普及するには、鍵を見つけないと、人に伝えられない。

美佐子：そこにNGOの役割があるのではないか。

久保：やり方を伝えたらいい。

駿介：社会的、相対的な意味を説かなければ、我々の運動を続けられない。

美佐子：まず、植林プロジェクトを推進し、成果が表れたところで農民会議第二段を開催し、条件が整えば必要性の高いカンボジアで環境事業を開きたい。秋にはマレーシアに人を送り、タイ農村の農業の試みの本の訳をできるだけ早く完成させて出版したい。

JVCがめざす豊かなタイの森

■このプロジェクトが生まれるきっかけは

□JVCは1987年からタイ、ブリラム県で農村開発プロジェクトをはじめた。水田地帯において、土地を疲弊させず、農民がいつのまにか食糧ではなく、単一作物を栽培していたという落とし穴に落ちないように農業を広めてきた。

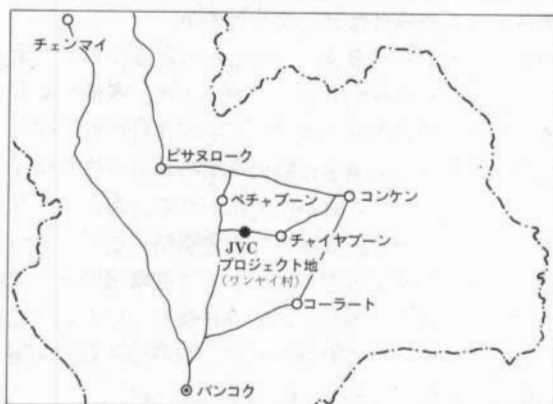
この複合経営農業(Integrated Farming)は数十年にわたってこれを推進してきたクワ先生、ユー氏という人たちがいる。この農法を村全体に普及し、周辺の村にもネットワークを作って広げているサクーン村というお手本もある。さらに、ネット(NET、タイのNGO)という農民に複合経営農業を総合的に理解させるトレーニングセンターもある。

一方、山岳部においては、この20年、急速に森林がなくなってきた。森林破壊を食い止め、森林を再生する森林農業(Agro-forestry)の試みも、ウィブン村長などぼつぼつとはあるが、数においても面積においてもたいへん少ない。ネットのような、トレーニングセンターの役割を果たせる施設もない。ではJVCで作ろうではないかというのが、山岳部でもプロジェクトをはじめたきっかけだった。

■チャイヤブーンをプロジェクト地として選んだ理由は

□森林農業センターはチャイヤブーン県パクディチュンボン郡ワンヤイ村に建設したが、活動はチャイヤブーン、ペチャブーン、ピサヌロークの3県で行っている。タイはいたるところがげ山だから、どこを選んでもおかしくないが、この地域を選んだのにはいくつかの理由がある。

第一に土地に馴染みがあったこと。中心になってプロジェクトを推進しているコメンさんをはじめ、コメンさんの15年来の友だちで、昨年からJVCに参加したカセムサンさん、ブラシットさんの2人もピサヌローク出身である。カセムサンさんがチャイヤ



ブーンに長く住んでおり、農民相手の仕事をしていたので、そのルートでコメンさんが1988年頃から少しずつ農民たちとのネットワークを作ってきた。

第二にここが水源地であること。ペチャブーン山脈上に位置するこの地域は、かつては湿潤で豊かな常緑熱帯林を形成していた。そのため、いまだにその頃の遺産である地下水が小川となって、いたるところに流れている。しかし、森林がなくなった今、山は保水力を失って小川の水量は減り、流れ込んだ表土に埋まって枯れつつある。また、換金作物であるトウモロコシ、綿は農業を多用するので、下流の水質汚染も著しい。そのため、この地域に森林を再生しなくてはならないと考えた。

第三にチャイヤブーンを中心にしたのは、まだまだ山頂には少しは森林が残っている山もあるからだ。この残った森林のすぐ下に植林すれば、植林地にも野生種が自然に広がってきて、もとの植生を回復できる可能性が高い。しかし、ペチャブーン北部のように、見渡す限りはげ山で、換金作物の栽培を長年続けている地域では、再生はより困難だ。一番困難なところを選んで悪戦苦闘するより、やりやすいところから素直に広げる方がいいと思った。もっとも、チャイヤブーンを見ても、ほとんどの人々は絶望にかられるが。



■豊かな熱帯林はなぜ消失したのか

□原因は国家開発政策にあったと考えられる。工業化に必要な資本を形成するため、まず、多様な要素の混在する森の中で「木材」だけが注目され、切られた。次に輸出用換金作物の栽培のための耕地拡大が奨励され、残った森が焼き払われて、農民が次々と入植した。また、島国の日本と事情が違い、他の国々と国境を接する国では、とくに近隣諸国とイデオロギーが違った場合、深い森は疑わしい人たちの隠れ家になるとして歓迎されず、戦略的に森の開墾が進められることも多い。

チャイブーンでは約20年前に伐採会社が入り、大木を伐採した。そのあと、伐採道路を伝って、さまざまな地域から農民が入植した。入植者はヤーン樹の木の樹脂を集めて生計をたてていたが、二度目の伐採が入り、ほとんどの木が切られてしまうと樹脂を集めることはできなくなり、焼き払って畑にしてトウモロコシを植えるようになった。

タイでは、かつてトウモロコシを豚の飼料用にはほとんど日本へ輸出していた。輸送方法がさらに完備した現在では、トウモロコシを飼料に育てた豚や鶏を屠殺し、肉の状態にして輸出している。チーク材などもコタツのやぐらなどに使用されてきたし、日本向け換金作物の栽培、エビの養殖、日本人向けのゴルフ場などリゾート開発も、森林破壊の主要な原因のひとつである。



(注)
ヤーンの木▶
樹脂はゴムになる

■こんなにはげ山になるまで、彼らはなぜ植林をしなかったのか

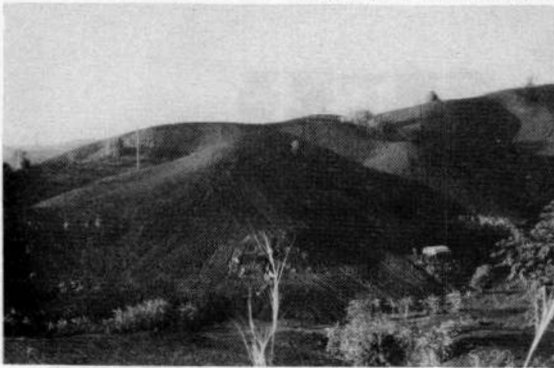
□「日本人は災害の恐さを知っていたので植林をした」と言いたいのかもしれないけど、それはいささか誤った認識だと思う。日本は国土の75%が森だといっても、ほとんどの森は営林、材木用の森だ。人から見れば緑豊かに見える森も、他の生物たちから見ればちっとも豊かな森ではない。その証拠にあちこちで猿、熊、鹿などが森に住めなくなって里に出てきている。野生の植物も死に絶えている。根が浅い針葉樹ばかり植えているので保水力もないし、葉も多くないので土も豊かでない。本当に森を守る民族だというなら、本来そうであったように、多様な生物が共存できる森を作ったはずだ。ましてやゴルフ場やスキー場を作るのも考えるはずだ。日本の森は営利で植林され、今では外国の木を切る方が安いからという営利で見捨てられている。

つまり、日本の森はタイのはげ山と大差ない。タイではトウモロコシを4カ月で収穫するけれど、日本では杉を50年で収穫する。両方とも換金作物だ。タイにも、チーク、ユーカリなど、営林目的の植林はたくさん見られる。

■JVCのめざす植林とその方法は

□多様な種が共生する森、そしてその森から果物、薬草、食糧、薪炭材などいろいろな幸が得られる森を、その土地に住む人たちが自身が作ること。森を再生し、自然と共に生きることがとるべき道であることに気がついている人、あるいは気がつく可能性のある人を見つけ、彼らを励まして森林農業を確立し、森林農業で生きていけるだけではなく、より充実した生活ができることを実証し、後に続く人たちを増やすことによって森を広げる。

■時間がかかりそう。外部の人たちを動員しても、



一気に植林した方がいいのでは

□植林することは簡単にできる。しかし、誰の土地に植林し、誰が管理し、誰の利益になるのかを考えなくてはならない。もし、農民の土地を取り上げて植林し、しかも植林が農民の利益にならないとしたら、農民はひそかにその土地を取り返すチャンスを狙うだろう。チャンスは、山火事などの形で訪れるかもしれない。これでは植林と破壊がいたちごっこのように繰り返されるだけだ。成功する方法はただひとつ、その地域の人たちが森を守りたいと心から願うときのみ守られる。

日本では植林の認識が遅れている、あるいは偏っていると思われるが、タイにおいては、共同体植林 (Community Forestry)、社会植林 (Social Forestry) などの論議が盛んで、NGOのみでなく、政府にも地域の人たちの参加なくして森林は再生できないという、共通の認識がすでに成立している。あとは、村に住み込んで農民と共に活動するJVCのスタッフのような、農民に意味を説き、励ます人たちが、共同体組織者 (Community Organizer) をいかに見つけるのか、育成するのかということだが、これが実は一番難しい。

■どんな人がNGOスタッフとして植林農業、複合経営農業などを推進していくのにふさわしいのか

□まず、鋤の握り方も知らず、口先だけ雄弁では農民は信用しない。動植物に愛情を持ち、水、土などについても知っている人。伝統的な農的生き方を踏まえた上で、農業問題に関心を持ち、世界的な視野で構造的にとらえられる人。自分がリーダーとならず、農民を励まし農民の中にできるだけたくさんのリーダーを育成することができる人。知識を与えるのではなく、農民のもっている知恵を引き出すことのできる人。NGO、僧侶などとのネットワークを作り、それを使って農民の視野を広められる人。



■JVCにはそのようなスタッフが集まっているのか

□かなり優秀な人がいる。しかし、一人ですべてを兼ね備えている人をさがすことは難しい。農村にいたがる人は対外的なことは苦手、対外的に動こうとすると一カ所に長くいることができないので、農民との関係が希薄になりがちだ。実際には得手不得手があるので分業している。適材適所ということもあるが、本当は一人で双方を兼ね備えていることが望ましい。

いい人さえ見つければ、ラオスにもカンボジアにもプロジェクトの必要性はあるのだが。

■プロジェクトがはじまってそろそろ1年になる。

農民の中から核になる人は出現したか

□活動地を広く設定したのは、広域の方がひとつの村から見つけるより、元気な人たちを見つけやすいということがあった。現に、森林を焼き払わないで残して来て、もっと広げようとしている農民、積極的に複合経営農業に取り組んでいる農民、村の森林を守り、広げようとするお坊さんなど各地にいる元気な人たちをJVCは「発見」し、彼らを中心にグループを結成するなど、活動を進めている。しかし、理論的によく考えている農民でも、借金の返済に終われ、出稼ぎに行くか、このまま農民としてとどまるかという二者択一を迫られている人もいる。

■JVCのチャイブーンのプロジェクトの成功の可能性は

□わからない。局地的には森を回復できる自信があるが、それが広がってはげ山がほとんど緑になるかどうか、保証することはできない。自然が数千年かけて作り上げた森がたった20年で消滅した。日本人も含めて、人間全体がどう生きるか問い直す時期にきていると思う。

写真で見る 環境プロジェクト

環境プロジェクトでは農民を組織し、グループで植物性農薬の材料集めや生産した野菜の出荷などを行っている。また丸裸になった山に早生樹を植えて土壌流出を防止するとともに、木々の間に野菜を植える。



▲農薬に使うナンバンサイカチを採集する - ①



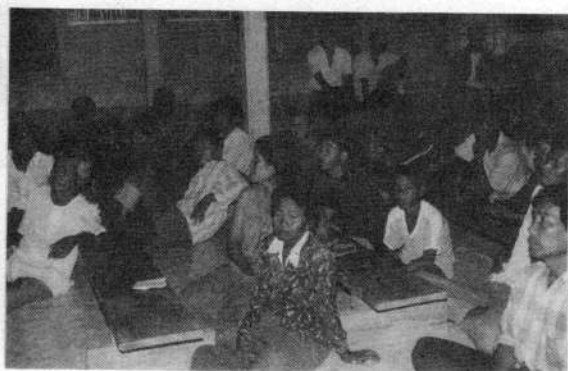
▲家族総出で葉をむしりとる - ②



▲摘んだ葉をすりつぶす - ③

すりつぶした葉と水を▶
カメに入れると農薬が
できあがる - ④

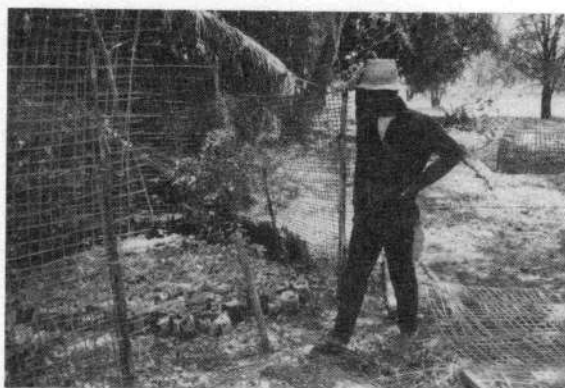




▲
村の人たちを集めてJVCの説明をする
チームリーダーのコメン(ワンヤイ村保育園)



◀ マーケティングを担当するカセムサン(上)と
農業技術者のブラシット(下)



▲
自然農法をしているブラッサートさんの苗床
果樹が多い



▲
森林農業を始めて2～3年のスラポンさんの畑
後ろの山にはほとんど木がない



▲
5～6年もすると木々がうっそうとしてくる

タイの森はなぜ消えていったのか

経済開発による森林の伐採

1988年11月、タイ南部を襲った集中豪雨は広域に大きな山津波を起こし、400人以上の人が亡くなった。たくさんの盆地村が厚い土砂の下に埋まり、砂の海の下に村があったと言われても、想像がつかないほどであった。山が削り取られた原因の一端が、過剰伐採と、伐採跡地を焼き払っての単一商品作物であるゴム栽培地の急速な拡大にあることははっきりしていた。この事態を重く見て、タイ政府は翌年、森林伐採の全面停止に踏み切った。

1960年代初頭、国内資本による工業化に失敗したタイは、海外資本を導入しての輸出型工業化へ踏み切った。1961年、「社会経済開発計画」第1次5カ年計画が始まったとき、開発とは、豊かな森林を伐採して資源として有効利用し、その跡地を開墾して耕地を増やし、そこに売れる作物を栽培することだと信じられていた。チークをはじめとするあらゆる大木が伐採され、商品作物として、米、砂糖キビ、ゴムに加えて、キャッサバ、トウモロコシ、ユーカリなどの栽培が紹介され、森林は次々と耕地にかわっていった。おりしも、ベトナム戦争が戦われているなか、東側の勢力をタイ国境で食い止めようとする目的で行われたアメリカの経済援助による舗装道路がタイ国中に張り巡らされ、国土の末端まで市場経済に巻き込まれていった。



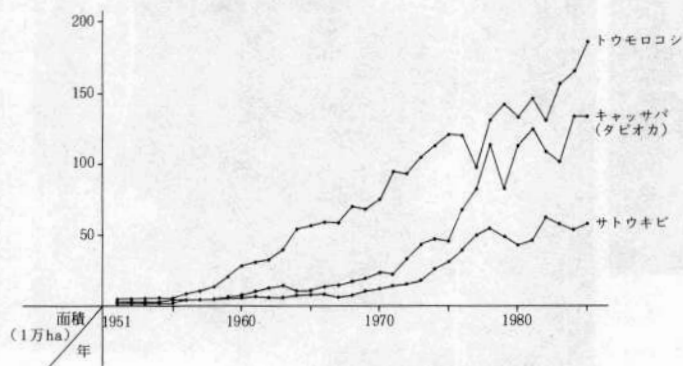
南部を襲った洪水

森林を消失させた政治的要因

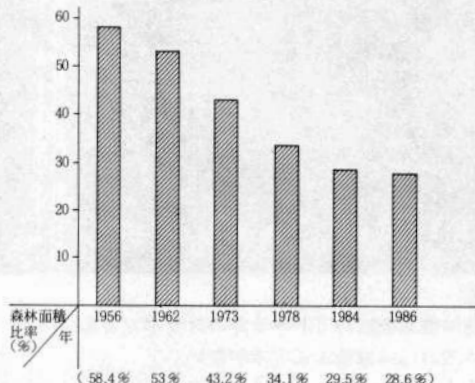
森林消失の原因のひとつに、他国と長い国境線を持つタイの位置的、政治的背景がある。タイと1500キロメートル以上の国境線を共有しているビルマでは、1962年の軍事クーデター以後、中立・非同盟の社会主義の道を歩んで鎖国状態にある。また、国境周辺では、カレン人、シャン人などがビルマ人優先の政治を嫌って民族独立戦線を戦っており、タイ、ビルマ間に一種の緩衝地帯を形成している。

やはり、1500キロメートルの国境線をタイと共有するラオスは、第二次大戦後、フランスから独立を果たしたものの、それ以降も続くフランスの介入、ベトナム戦争によるアメリカの介入などで内乱が続いた。1975年、カンボジア、ベトナムの解放勢力による、プノンペン、サイゴンの陥落に勇気づけられ、

タイの商品作物の耕地面積



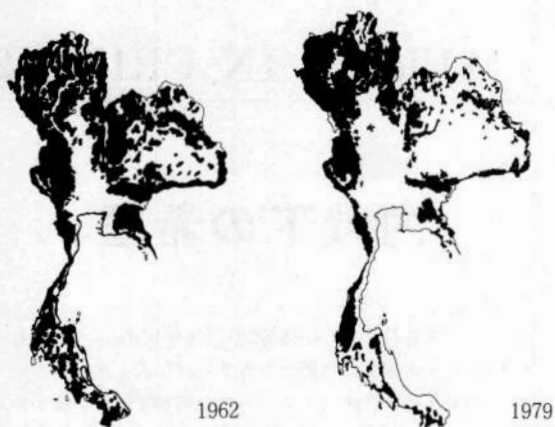
タイの森林面積



FAO資料を参考に東村康文作成



タイの森林面積



パテト・ラオが全土を制圧して社会主義政権を樹立してからは、タイとの国交は断絶された。

タイと600キロメートルの国境線を共有するカンボジアは、東西両陣営が角逐するなか、大国との非同盟、タイ、ベトナムとの闘争回避という中立政策を模索していた。1969年には経済自由化政策へ転換したものの、ベトナム戦争の影響で内戦が激化し、1975年、クメール・ルージュがプノンペンを制圧すると鎖国し、ボル・ポトによる同胞の大量殺りくが行われた。1979年、ベトナム軍に支えられて現政権がプノンペンを占領して以後、東西両陣営の思惑のなか、国際社会はタイ国境に留まった反ベトナム勢力を国として承認するという策をとり、カンボジア本国は世界の孤児になった。

また、タイ国内では、1973年、史上初の学生蜂起によって腐敗したタノム政権が瓦解し、学生運動の活性化、農民運動の組織化、労働争議の頻発に特徴づけられる〈民主化の時代〉が出現した。しかし1976年、軍事勢力は、保守的な都市新興住民の支持を背景に武力で〈民主化の時代〉に終止符を打った。そのため、数百人の運動家たちが弾圧を恐れて森に入り、ある者はマラリアや戦闘で亡くなり、ある者は投降し、ある者は1981年、政府が罪に問わないと発表するまで、森に留まった。

このように、近隣三国と背後の大国、ベトナムと中国が社会主義体制をとっていたため、タイは自国の社会主義化を恐れ、ゲリラが決して潜めないよう、深い森林を焼き払ったり、森林を開いて積極的に新しい村を誘致したりした。

そのため、1960年に国土の53%あった森林面積は、1988年には28%（実際は20%前後ともいわれている）に減少した。

1987年の第6次社会経済開発計画5カ年計画において、はじめて森林保護への留意が盛り込まれたものの、干ばつの頻発、土壌の疲弊など、すでにタイの環境悪化は深刻な事態を迎えており、そんな矢先に大災害が起こった。

各国の思惑がさらに森林の減少に拍車をかける

おりしも、タイとは長い間国交を断絶していた三国は経済政策に行き詰まり、西側との関係回復を考え始めていた。西側への開放願望は、当時のタイの首相、チャーチャイの「東南アジア大陸を戦場から市場へ」政策と利害が一致して、次々と国交回復がなされた。タイ政府と私企業は手に手をとってビルマで伐採権を手にいれ、それまで密伐採していたラオスからは堂々と丸太を買い、商品作物を植えさせ、カンボジアからは現政権から材木をかうと同時に、タイ・カンボジア国境の森林地帯に留まるボル・ポト派からも材木を買っている。つまり、タイの伐採禁止令は、近隣諸国の森林を伐採することができるという目算があってはじめて成立したものだった。

海外に木材をあさる日本はすでに、ラオス、カンボジア両国から床材として松、柱材として硬木などを輸入している。

必要な木材を買いつけ、相手に経済力をつけて、一気に工業生産品を売りつけたいタイや、日本などの思惑と、外貨を獲得し、国の経済発展をしたいラオス、カンボジアの思惑は合致したようにみえる。しかし、ラオス、カンボジアにしてみれば、背水の陣、しかたなく森林を伐採しているものの、植林のための資金も人材も不足している。さらに密伐採を取り締まるだけの人的余裕もない。

（岩崎美佐子）

AFRICA IN CRISIS-2

内戦下の希望

JVC事務局長 林 達雄

去る5月6日、一時帰国していた山田さんとともにエチオピアの首都アジスアベバに入った。JVCが内戦下のエチオピアでいったい何ができるか確かめるためである。反政府勢力が首都の西70km地点まで迫っているといわれ、日本大使館からは邦人への退避勧告が出されていたもので、少なからぬ緊張感を持って空港におりた。しかし、拍子抜けするほどののんびりした空気が待ち受けていた。市民の表情も普段とほとんど変わらない。治安が悪くなり、強盗が増えたという話は聞かない。どんなに状況が悪化してもエチオピア人が外国人を襲うことは有り得ない。とエチオピアの友人たちは口ぐちに断言した。本当に誇り高い、また、びっくりするほど辛抱づよい人々である。米国大使館の出した時期尚早の退避勧告が、逆にエチオピア人を動揺させたともいう。

エチオピア人がまた少し好きになった。同時に我身を恥じた。恥ずかしいことに「内戦＝最悪の事態＝危険で外国のNGOには関わりにくい状況」という先入観に陥っていたのである。自分で出向き、肌で実感した事以外は簡単に信じてはいけない。何よりも、内戦というものの与えるイメージに騙されてはいけない、と肝に命じた。

内戦によって最も深刻な影響を被るのは都市住民であろう。内外からの物資の流入経路が寸断され、食糧をはじめとする生活必要物資に困るはずである。しかし、エチオピアの首都アジスアベバには、海外・国内からの物資がそれなりに浸透し、人々が逃げこんだ人口の増加に見合う程度の物価の上昇であった。もちろん都市住民が困窮していなかったわけではない。失業者が150万人といわれ、他の国なら暴動が起こってもおかしくない状況の中を、親戚縁者間の相互扶助でしのいでいるようであった。平常時でも生活状況の厳しいエチオピアでは、外国人やマスコミが騒ぐ程には、ことさら内戦が問題を深刻化させたわけではなさそうである。

さて、人口の90%以上を占める農民たちにとって、内戦はどんな影響をあたえているのだろうか。援助関係者たちは、干ばつ被災地に海外からの食糧が配給できぬことを憂えてきた。もちろんそうした一面はあるだろう。しかし一方では、中央政府からの支

配が農村部に及ばなくなることにより『飢え』から解放されるチャンスなのかもしれないのだ。

言うまでもなく、エチオピアの人々の抱える最大の問題は飢えである。その原因のひとつは、木を伐りすぎ、土地がやせ衰えた所に、干ばつが頻繁に見舞う生態系の問題である。もうひとつは、社会的な問題、中央による地方への搾取の問題である。都市住民を食わせるために、政府は農村から収穫物の一部を強制的に安く買い上げてきた。税金の取り立てもまた厳しい。かつてJVCの関わってきた村では、政府の役人がやって来ると村ぐるみで逃げ出すと言っていた。今回訪問したエチオピア人の学者はこうした搾取に対して、農民たちは意識的に労働を手控え、収穫量の低下と引き換えに無言の抵抗を続けてきたのだともいう。だとすれば、内戦によって中央政府からの強制が弱まることは、農民たちにとって飢えから解放される機会なのかも知れない。

それから2週間後、反政府勢力の一派がアジスアベバに入り、学生デモ、武力鎮圧、兵器庫爆破などの混乱があり、1カ月間ぐらい外国人の出入国ができなくなった。しかし、その間も山田さんはエチオピアに留まり、エチオピア人のスタッフとともに元気に次の活動の準備を進めた。エチオピアの地元のNGOの連中とも親しくなり、彼らの行っている農村開発の応援もしてきた。そして、7月の初め、かつてのプロジェクト地マーシャ村の調査を行うことができた。

マーシャ村では植林地の保護や苗木作り、泉の保護などかつてJVCが率先して行ってきたことを、小規模ながら村人自身の手で行っていたという。内戦により中央政府からの強制力が弱まっている間に、農民たちの意欲が芽生えてきたと考えて良さそうである。新政権に対しても、都市住民を優遇するために農村を搾取するような政策をとらぬよう望みたいものである。JVCも早ければ今年中にも活動を再開できる可能性がでてきたので、詳細はその時点で確かめることにしよう。

内戦、少なくとも私たちは、その表面的な姿に惑わされず、一歩踏み込み、その背後に暮らす人々と結んでゆきたい。

郵政省「国際ボランティア貯金」からJVCに6000万円

本年1月から始まったボランティア貯金の1991年度配分決定が、さる6月21日に行われた。第三世界で活動するNGOの事業を支援しようという全国の郵便局を通じての呼び掛けに賛同した預金者が3月までに212万人となり、約11億円が集まった。今回の配分額9億1358万円は、102団体の実施する148事業に配分され、そのうちJVCは以下の10事業に対し60,469,000円を受け取ることが決まった。

ボランティア貯金は、郵政省を介しているとはいえ、ODAではなく、市民からの寄付である。JVCではこのお金を第三世界各地での活動にしっかりといかし、その成果を全国2万4000カ所の郵便局を通じて報告していきたい。

また、3年目に入ったODAによるNGOの補助金もカンボジアとベトナムのプロジェクトに申請中である。

国	プロジェクト名	使 途	配 分 額
ベトナム	視聴覚障害児施設支援	ハイフォン市の視聴覚児童教育訓練センターの、設備改善、訓練機器・車両購入、人材育成・専門家派遣のための費用	6,080,000
	農民に対する巡回医療保健	農村地区での巡回医療のための、車両、医療機器購入および、医療保健人材育成と専門家派遣のための費用	7,703,000
	スラム下水道施設建設	都市スラムにおける、住民を主体とした上水・下水設備敷設をふくむ生活環境改善のための工事、および技術費用	14,309,000
タイ・環境	農業と地域活性化のための青少年育成	農村の小学校での農業指導、青少年キャンプ、視聴覚教材などの購入	2,064,000
	複合経営農業に基づく農村開発	複合経営農業の奨励、伝統医療の復興、婦人グループの技術訓練セミナー開催、水牛銀行の開設、人件費、車両費	2,548,000
	農村での僧侶による森林回復	農民に対する環境保全指導を目的とする、タイ国内7カ所での植林用の苗木センター建設、視聴覚教材の購入	4,796,000
	農民に対する植林指導	家畜銀行、スタッフのインド、フィリピン及びタイ国内での研修費、及び種苗代	2,631,000
ラオス	生活環境改善・保健衛生	生活改善普及員の研修、農民の東北タイスタディーツアー、農業ハンドブックの製作、養鶏・養豚、機械実習費ほか	4,318,000
カンボジア	農村における井戸掘り	プノンベン郡の村々の池の修復・管理や、手掘りの井戸掘りのための機材・資材・技術研修等の費用	6,808,000
	国内避難民のための巡回医療	衛生改善のためのトイレ、小規模給水の設備、医療スタッフの人件費、医療機器・医薬品及び車両購入費	9,212,000
	合 計		60,469,000



技術学校のカンボジア人スタッフ

ODA補助金（申請中）

国 名	プロジェクト名	申 請 額
カンボジア	職業訓練所建設事業	10,000,000
カンボジア	青少年職業訓練計画事業	9,950,000
カンボジア	僻地巡回医療診察事業	4,370,000
ベトナム	スラム学習援助事業	5,000,000
合 計		29,320,000

イラクに対する国連経済制裁の早期解除を訴えます

《1990年8月6日の国連経済制裁決議から満1年を迎えて》

●現在、イラク市民の生活は食糧、水、衛生面においてすでに危機的状況にあります。コレラ、腸チフスなどの伝染病の蔓延と子供を中心とした栄養失調による死が連日のように続いており、さらに猛暑を迎えて事態は一層深刻なものとなっています。

●国連決議では、イラクに対する食糧、医薬品などの人道的物資の供給については経済制裁項目から除外されています。しかし、実際には各国政府の輸出規制によって、イラクが注文しても購入できない現実があります。さらに、経済制裁によってイラクが外貨を獲得できる唯一の石油輸出は一部しか認められず、また海外資産も未だに凍結されています。そのため、自力で食糧などの制裁除外品目を輸入しようとしても代金が支払えない状態にあります。

現在のイラク市民はわずかな援助物資に依存するしかない状態です。食糧の7割を海外からの輸入に頼っていたイラクは市民の最低限度の食をまかなうことすらできません。このように、国連経済制裁決議の影響によりイラク市民は依然として困難な事態に直面させられています。

●また、発電所、電信電話局、工場、橋などの基幹施設が多国籍軍の攻撃によって破壊されているため、水道、下水、病院など市民生活を維持する基本的な施設が十分に機能していません。それが市民生活をさらに圧迫して、危機的状況を増幅しています。イラク国内にはこうした施設の修復できる技術者や医者などの人材は存在します。しかし、経済制裁によって修復のための部品、機材や医療器具などの購入ができないため、自力での基幹施設の修復、人々の治療ができない状態にあります。

●国連の経済制裁措置は、本来イラクのクウェートからの撤退を目的としたものでした。しかし、イラクがクウェートから撤退して半年近くたった現在でもなお経済制裁が解除される見通しがありません。このような形での経済制裁の継続は、単にイラク市民を窮状に追い込むだけであり、早急な解除が求められます。

●こうした状況を鑑み、私たちはあらゆる政治的立場を乗り越えて、これ以上イラク市民に多大な被害を出さないように以下のことをアピールします。

1. 日本政府及び各国政府に対し、
国連決議に基づき、現在実質的に凍結されている食糧、医薬品などの人道的物資輸出を即刻認めること。
2. 国連事務総長及び安全保障理事会理事国に対し、
経済制裁決議を軍事目的を除いて即刻解除すること。
3. 世界の市民及びNGOsに対し、
経済制裁により、食糧、医薬品、飲料水に困窮するイラク市民への人道的援助活動を支援すること。

前回のイラク訪問から既に1カ月。経済制裁の枠組の中で、我々自身も必要物資の調達に苦しんだ。この援助の遅れによる焦りの中で、経済制裁こそがイラク市民の苦しみの原因であることを再確認した。

その意味で経済制裁解除のためのアピールは、現場での活動と同等の重要性を持つものと考えている。

このT & Eが皆様の手に届く頃には、また状況が大きく変化しているはずだ。変化が苦難からの解放となるよう、皆さんと共に我々も活動に邁進する。

引き続いてのご支援をお願いしたい。

(7月23日記 JVC湾岸 寿賀一仁)



抵抗力のない小さな子どもから病気になるっていく

JVCプロジェクト

1991年6月25日現在

活動地名	活動内容	担当者	支援団体
東京本部	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。 機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行。 JVC説明会－毎月第1月曜日 午後6時～8時 毎月第2、4土曜日 午後2時～4時	岩崎駿介（代表） 林 達雄（事務局長） 熊岡路矢、星野昌子、 前川昌代、山口誠史、 鈴木由子、今泉 恵、 富安光子、富安庸太郎、 柴田久寿子、小野豪大、 高梨直樹、赤阪むつみ	全国社会福祉協会
JVC神奈川	神奈川県企業庁の水道技術者2名をJVCのイラク調査チームに派遣した。 神奈川県国際交流会と共催で第三世界理解講座を開催した。 夏のエチオピア支援バザーの準備を進めている。	清水俊弘	
	●定住難民プロジェクト 6月7日、横浜市内の精神障害者地域作業所、あかね工房の人たちと「ラオス・ベトナム料理の会」を行った。 6月15日、相模原南文化センター、6月22日、インドシナ難民の明日を考える会年次総会にて、岡村がインドシナ難民の背景と現状について報告をした。	岡村達司、他約60人	ジャパン・タイムス、神奈川県福祉部、禅林寺龍華会基金、ケアハウスさくら苑、明るい社会づくり運動神奈川県協議会
環境 タイ (チャイブーン 県)	●植 林 農民が作った苗も、JVCが配った苗もすべて植えたが苗が足りない。陸稲の植えつけは順調に進んでいる。 ●国際会議（5月2～10日） 7カ国73人の参加者があり、盛会のうち終了。それぞれが問題意識を持ち帰った。	岩崎美佐子、Komain Soongsumalaya, Kasemsan Sriwatana, Chukiat Katchamattya, Prasit Ingo, Chalaem Kaewchoho	庭野平和財団、日本住宅協会、YOKE ジャスコ
調査・研究	・東南アジアの森林破壊と換金作物についての研究 ・人間居住キーワード辞典の作成	束村康文	FASID 国土庁
イラク	今年3月から毎月イラクにスタッフを送り、現状を調査している。5月にはイラク北部のアルビル、スレイマニアのクルド人居住区に26.2tの食糧を送った。 6月には、医師をバスラ、バグダッドに派遣し、医薬品援助をするともに医療状況を調査した。また、神奈川県の協力により水道技術者2名をバグダッド、ヘラ、ナジャフへ派遣し、水道施設を調査した。	柴田久史、船川秀夫、 寿賀一仁	全日本自治団体労働組合（自治労）、神奈川県800万県民による湾岸戦争被災民等への支援募金、テレジア会、愛知教育大附属中学校イラク救援基金、神奈川無所属議員会議

活動地名	活動内容	担当者	支援団体
エチオピア 東ゴジャム州 ビチュナ ショワ州 ゴディノ ダロチャ アジスアベバ	●国内避難民郷里送還プログラムの支援 内戦のためにアジスへ避難してきた農民、および村から強制的に徴兵された旧政府軍兵士の郷里への送還プログラムへ、5000ブルの支援をCRDAを通じて行った。 ●現地NGOへの支援 FSO (Family Service Organization) というエチオピアのNGOとの協力体制をつくるための調査を行い、スタッフの相互研修、アジアとの情報交換を主体とした支援を進めることを決めるとともに、FSOの水開発プログラムの資材の輸送を行った。 ●ビチュナへの調査 内戦のために一時撤退をしていたビチュナへ入り、事務処理と状況確認を行う。青ナイル沿いの低地は、今年も雨が降らず、蒔かれたソルガム、メイズの収穫は見込めない状況にある。 ●今後の活動 ビチュナと同様の調査をマーシャでも行い、その後、プロジェクト地、内容を決定する。	山田 盛, Solomon, Shikur, Ali, Yodit, Tekleyohannes, Burahane, Amudu, Gabreamruk, Baiye	CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動, モラロジーMIRC, 立正佼成会, 西本願寺, 東京グリーンウォーク, メサイヤコンサート, エチオピア支援バザー, ほか
ベトナム ホーチミン市 ハイフォン市	●地域総合復興(南部) ひきつづき第8区・ビンチャン郡において、障害をもつ子どもたちの訓練校、エビ冷凍工場で働く子どもたちのための夜間補習・識字学級、病院/産院、職業訓練施設などへの設備改善支援を行っている。ヒーボンスクールにミニバスが到着、フォンフー小中学校5教室の改築が完了した。 ●帰還難民のための職業訓練(北部) 自動車のクラスは9月開講をめざして、ワークショップの建設、機材の購入等を進めている。	熊岡路矢, 中野周二, 稲見 圭, 稲見由美子, 久保英之, 久保早恵 〔南〕 Dinh Khac Mien Cai Bich Thuan Le Thanh Hai 〔北〕 ハイフォン市労働局	(南) 庭野平和財団 立正佼成会 メサイヤコンサート (北) UNHCR
カンボジア ブノンペン市 カンダール県 バンティミエン チェイ県	●サンタビエップ技術学校/ワークショップ 日本からもってきた自動車整備の教科書のカンボジア語訳が進んでいる。上巻をバンコクで印刷・製本して第四期コースの開始に備える。第四期は91年9月より開始。学科・実技の両方の訓練を受ける生徒を25人、学科のみの受講生を15~20人を募集する。 ●母子保健 カンダール県内7郡及び県都の村々の助産婦・伝統産婆の技術向上訓練が続いている。妊婦検診により、出産時に異常が予想される妊婦を早期に発見できるようにするための訓練である。 ブノンペン郡で合計12カ所の村の診療所を改築する。既に4カ所で着工し、その内1カ所で完成した。 ●井戸・ため池作り ブノンペン郡で川や湖が近くになく深井戸も掘られていない村を選び、村人の手による浅井戸やため池作りを助ける。古い浅井戸でセメントリングが壊れたり、穴が石などで埋まってしまったり水位が下がって水が涸れてしまったりしたものを修復する。 また、家畜の進入を防ぐための柵がなかったり、池の水をきれいに保つための手入れができていないため池を使えるようにする。古い浅井戸やため池もない村では、新たに掘る。 ●国内避難民への緊急援助 カンボジア北西部バンティミエンチェイ県シソボン郡に戦火を逃れて避難している人々が稲作ができるよう助ける。6月に40ha分の浮き稲の種まきに必要なる費用を援助した。	古西 勇, 馬 清, 本橋 栄, 竹井潤子, 飯島かんな, 鈴木琴子 「現地の実施機関」 自動車輸送公社(運輸省) 母子保健局(保健省) カンダール県保健委員会 ブノンペン群保健事務所 バンティミエンチェイ県 国内避難民委員会(農業省)	創価学会青年平和会議, モラロジーMIRC, 立正佼成会, 日産労連, 西本願寺高岡寺族青年会, 毎日新聞大阪社会事業団, 浄土宗東京教区青年会, 国際保健協力市民の会(SHARE), 四日市商業高校, JVCカレンダー, カリタス・ジャパン, 真如苑, メサイヤコンサート

活動地名	活動内容	担当者	支援団体
ラオス ビエンチャン市 ビエンチャン県 ボーリー・カム サイ県 カンムアン県	●生活改善普及員養成プロジェクト 保健衛生、農業、教育など生活全般の改善に携わる女性の生活改善普及員を養成すると同時に、普及員の地域開発活動を支援している。 ・4月22～26日、第Ⅱ期生向けレヴューミーティングをカンムアン県母子センターで実施した。今後、普及員達には継続的な教育の機会が必要であろう。 ・4月1～6日及び5月21～25日、各々ボーリーカムサイ県、ビエンチャン市にて、トイレ作り講習会を実施した。参加者達は楽しく実習を終えたようだった。今後、この参加者が講師になって村に広めていくことが期待される。 ・5月27～28日、ボーリーカムサイ県にて、養鶏・養豚講習会を実施した。参加者達もかなり熱心に受講していた。 ・11月初旬に予定している伝統織物展示会に関しては、既に主要産地での聞き取り調査やビデオ収録を開始しており、その資金提供を行なっている。	磯田厚子、北詰秋乃、 Thanongsi Solankum Maliphet Sukkhasume (ラオス女性同盟) Khamone Phetdao- heuan, Khampone Saignavong	UNDP, UNIFEM, RIJ, NVC, 聖ヨゼフ老人ホ- ーム、難民と地 球の緑を考える 会、グループ・ カンガルー、ジ ャパン・タイム ズ、メサイアコ ンサート、JVC カレンダー
タイ バンコク	①総務、会計、資金調達 ②各機関(国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体)及び東京事務所、ラオス・カンボジア・ベトナムを含む、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動、④在タイ日本人との連絡調整 ・バンコク代表のボンピモンとカオイダンのソムヨットがJVCの総会に出席した。 ●奨学金プロジェクト 家庭訪問、学校訪問を行い、小学生70名、中学生17名に奨学金を支給した。 ●クロントイ図書館 図書館前の開き地に運動場を作っている。	Pornpimol Chaiboon, Kamol Mingmuang, Manas Torkan Suntaree Lawsuwan, 池島千津子、主婦ボラン ティア15名 Samruay Jongyork- lang	全国社会福祉協 議会 メサイアコンサ- ート Tree for life の会、雄勝町町 内寺院会、国際 ソロブチミスト 駿河、からし種 モラロジーMIRC、 国際ソロブチミ スト山形、山形 中央ライオンズ クラブ、太田慈 光会
カオイダン (カンボジア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 かじ屋及び大工コースで作られる農具類を、カオイダン内の他団体(YWAM)の農業プログラムに活用させている。 ・6月18～19日、日本政府調査団が日本行き希望者の面接を行った。	Somyot Rattanatham Sutthi Netprakhon, 井本勝幸、井本美奈	UNHCR, SV (Stichting Vluchteling) 山形日産、日産 労連
パナニコム (第三国定住待 ち キャンプ)	●日本語学校 ラオス生徒10家族31名が6月5日日本に出発した。出発前、彼らを対象にフライトオリエンテーション、及び女性のための生活オリエンテーションを実施。また、今後も授業を続ける生徒たちのクラスの再編成も行った。なお、出発した31名は、現在姫路定住促進センターに滞在している。	竹村雅義、蘭牟田浩美、 鈴木彰子、木山早織、 大槻和弘、Chowarite, Duangprom	IOM
ブリラム県	●農村開発 今年から新しく対象に加わった村の村人が、複合経営農業の見学を行った。	Thongkham Sumru- engram	モラロジーMIRC, JOFIC, JVC カレンダー

JVCの活動とその目的に御理解を

▶ **JVCとは**—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶ **JVCの会員募集について**—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には機関誌の購読料が含まれています。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 学生会員 3,000円 団体会員 30,000円)

▶ **機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい)

編集後記

▶「この人をあの人に会わせたい！」そんな思いが農民会議「農業と環境」で実現した。マレーシアで魚のように潜っていたあの人、ラオスで鉄砲を担いで飛ぶように歩いていたこの人。この人の元気はあの人にあげ、あの人元気はほかの人たちにあげた。みんなありがとう。まだどこかで集まりましょう。(み)

▶110号の編集後記の募金総額に誤植がありました。

訂正してお詫びいたします。

23,834,422円→83,834,422円



▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. **アフリカ難民募金** (6月小計 98,700円)
アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. **グリーン・フォー・アフリカ募金** (6月小計 97,820円)
アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. **カンボジア募金** (6月小計 18,700円)
カンボジア国内の復興のために使われます。
- D. **タイ募金(奨学金・スラム・農村)** (6月小計 165,700円)
タイの人々の生活向上のために使われます。
- E. **ラオス募金** (6月小計 291,465円)
ラオスの生活改善プログラムに使われます。
- F. **ベトナム募金** (6月小計 48,200円)
ベトナム帰還者及び国内復興のプログラムに使われます。
- G. **定住難民募金** (6月小計 15,700円)
定住難民のための日本語教材費と家庭訪問員の交通費に使われます。
- H. **環境募金** (6月小計 22,700円)
タイ山間部で、環境を守るためのプログラムに使われます。
- I. **JVC運営経費募金** (6月小計 500,200円)
現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. **無指定募金** (6月小計 675,106円)
▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい)
加入者名—JVC東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (6月小計182名 1,222,135円)

犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

Trial & Errorは再生紙を使用しています

1991年7月20日発行 (毎月20日発行)

編集人 岩崎美佐子、前川昌代

発行人 林 達雄

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC) 東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎03(3834)2388 FAX: 03(3835)0519

Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (財)神奈川国際交流協会内
☎045(671)7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。